

「非二」の発達論・治療論

— 現代の発達障害的心性を捉える試み —

橋 本 尚 子

はじめに

近年増加してきている発達障害的心性をとらえるために、新たな関わりが心理療法、精神分析で模索されている現状がある(河合2010, 内海2015, 平井2016, 広沢2016他)。橋本(2017)では Balint を参考に従来の精神分析が二者関係, 三者関係が成立している患者を対象としてきたことや, 外的対象の非存在を特徴とする創造領域, また二者関係, 三者関係の心的構造を持たない二者関係以前のあり方と考えられる心性を「非二」として, 発達障害的心性について考察した。発達障害のあり方にも, 中核的なものから発達障害とは言い難いグレイゾーンまで幅広く, それぞれを丁寧にみていく必要があることがわかった。

また, 発達障害では, 愛着関係が成立する以前つまり二者関係成立以前(生後6から8か月以前)に発達のひずみがすでにあると考えられているため, 二者関係成立以前の早期発達において, 病理的ではない本来の発達としてはどのようなことが生じているのかを詳細に見て行く必要がある。そこで母子関係や環境を考えて行くことが, 治療論としても役立つためである。

本論では, 二者関係成立以前の発達論を精神分析や Jung 派ではどのように捉えているのかを概観し, さらにその治療論についても考察していきたい。二者関係成立以前に問題があると考えられている発達障害, また問題があるとまでは言えないが他者や主体という意識が薄く二者関係が明確に成立しているとは言い難い状態や, 他者や主体への意識はあるがあえて

「二」を判然とさせない「モードとしての発達障害」的あり方(田中2017), それらを全て含むものとして「非二」という言葉で捉えることとする。

1, 「非二」の発達について

Winnicott もまた, Balint と同じく, 「Freud による精神分析が前提としていたのは, 患者がいわば一人の人間(a person)であるということであり, これはいわば, その患者が他者との相互交流をすることのできる統一され安定したパーソナリティをもっていると仮定されていることを意味している。」と述べている。Winnicott によれば, Freud は「自己が分離しており自我が構造化されている」(1960a p.41)ことを前提としていたのである」と述べ, 二つの主要な問題が見逃されたとしている。1 つには顕在的な精神病であるために, あるいは患者がただ他者と交流できているように見えるだけであるために「人(person)」となっていない患者の問題がある。2 つには分析的な状況の主眼が早期の発達過程にあり, 人としての発現を促進する必要がある患者の問題である(グリーンバーグ2001 p.255)」と述べる。精神分析が前提としていた一人の分離した人間, 自我が構造化されている人間に対して, Winnicott は, それ以前の発達段階と考えられる, まず一人の人間となること, そこにいたるプロセスに注意を向けている。

Winnicott の発達論として, 個人の情緒発達における依存から独立への過程をみていく。幼児の潜在力は母親による育児と結びついたものとならない限り幼児そのものにはならないと述べるように, Winnicott の発達論では母親のあり方が幼児の発達にとってなくてはならぬものであるとされている。母親そして父親による満足な育児は, おおまかに次の3つの段階に分けられる。これらは, 二者関係以前, 二者関係, 三者関係をそれぞれ Winnicott の視点で捉えたものであると言える。

①抱っこ Holding

②母親と幼児とが(互いに独立した個人として)共に生きる—Living with

ここで(母親に代わって環境調整をする)父親の機能は幼児に認識されていない。

③父親、母親、幼児の三者が共に生きる。

ここで「抱っこ」という用語は、実際に幼児の身体を抱くことを意味するだけではなく“共に生きる”という概念が幼児にできあがる以前に環境から与えられるすべての供給を意味させるために使われている。共に生きるという言葉には、対象関係ができているという意味が含まれている。つまり幼児は母親に吸収された状態から離脱している。または対象(母親)を自己の外側のものとして知覚しているわけである。母親が一人の人として知覚される以前と以後では、幼児が必要とする関わりが異なることが示唆されている。さらに Winnicott は抱っこの時期についても、赤ん坊が母親という対象を知っていくプロセスを3つの範疇で述べている(1977 p.41-43)。

①絶対的依存

時期は、妊娠の終わりから幼児の人生の初めにかけての2、3か月であり、この時期の母親の状態を Winnicott は母親の原初的没頭(Primary Maternal Preoccupation)と呼ぶ。臨月から産後数週間にかけて、母親は自分の一部分のように見える赤ん坊の世話に取りつかれている。それにより、非常にうまく赤ん坊に同一化して赤ん坊がどう感じているかについてよくわかるのである。この時期の赤ん坊の状態に関して Winnicott は絶対的依存と呼んでいる。赤ん坊と同一化できない限り、誰も赤ん坊を抱っこすることはできないと述べるように、母親の赤ん坊への同一化の能力が非常に重要な時期である。この時期について Winnicott は Balint を引用し、「Balint(1951, 1958)は空気の中の酸素になぞらえて、赤ん坊はそれについて何も知らない」と言っている。この絶対依存の時期では、幼児は母親からの供給に気づく手立てをもたないのである。この段階の報酬は、幼児の発達のプロセスが歪められないことである。(1977 p.97-99)

母親からの一方的な環境の提供の時期であり、なおかつそこに母親の同

一化の能力が不可欠であるとする点がWinnicottの論の大きな特徴であると言える。

「育児の全過程は、その主要な特徴として、幼児に世界を着実に示してやるということがあるが略—、それは一貫して彼女自身である一人の人間による連続した管理があつてはじめてなされる—幼児が求めるものは彼が普通に得るもの、つまり、彼女自身として存在し続ける、ある人物の世話と注目そのものなのだ。」“彼女自身として存在する”ということについて、「人間性(The Person)を、役割を演じる(Acting)人—男性または女性、母親あるいは看護婦—から区別すべきである。彼らはいかに幼児のケアをするかを本やクラスを受講することから学んだことで、時に非常にうまくそれらの役割を演じる。しかしこの演じることでは十分(Good enough)ではなく、幼児や幼児のケアという仕事に没頭する人間(human being)によって世話されることによりはじめて幼児は外的な現実が一貫して存在することを見出すことができるのだ。」(1965 p.88)

この段階の母親の存在について、Winnicottは、幼児が連続性を持って世界を認識するためには、母親が彼女自身であることを非常に重要なこととみなしている。世話が重要であることには変わりはないが、表面的に演技られたり、学ばれたりしたものとしての世話ではなく、真にその世話に自分を没入させるようなあり方こそ必要なのである。おそらく演じることとの違いは、幼児のその状況に生じていることを生の自分の感覚で受け止め、本などからではなく自分自身として理解し、自分自身として生の反応を返すことで、関係を共に生きることに身を捧げることであろう。

②相対的依存

絶対的依存に対し、この相対的依存の時期では、幼児は母親の存在を

徐々に知るようになっていく。「相対的依存は漸次的な適応失敗を伴った適応の時期となるわけである。(幼児が)自分でできるようになったものから手をひくことは大多数の母親のもつ天性の一部であって、これはうまい具合に幼児の急速な発達と連動する。この段階の報酬は、幼児が何らかのかたちで自らの依存に気づき始めるということである。母親が幼児の前から姿を消すと、幼児には不安があらわれる。これは幼児が知る最初のサインである。幼児が何らかの形で母親への欲求を感じることができるようになったあとにあらわれる次の時期は、幼児が母親が必要であると、心のなかで知り始める段階である。この段階は6か月から二歳くらいまで続くといっていよう。幼児が二歳になるまでには、新しい発達がはじまっていて、これによって幼児は喪失を処理するだけの能力が生まれる。」

この時期は、人見知りや愛着の形成など、二者関係、二の世界が始まる時期であるといえる。幼児が母親の存在に気づきはじめ、徐々に双方向のコミュニケーションが可能になってくる時期と言える。別の人間であることがわかるからこそ、コミュニケーションが生じると言える。そして幼児が一人の人間になることを Winnicott は以下のように表現している。

「幼児が一単位となるということは、一人の人間(a person)となることであり、内側と外側とを持つことであり、身体のかなかに生きる一人の人間であり、多少とも体表(皮膚)によって境界されていることを意味する。外側が自分でないもの“Not-Me”を意味すれば、もちろん、内側は“自分”Meを意味する。今や、ものを溜め込む場所が存在するのである。子どもの空想の中で、独自の心的現実の内側に位置することになる。(1977 p.104)」

Winnicott はまたこれらが成立するためには幼児の同一化の能力が重要

であり、それは複雑な想像 Imagination の存在を意味するものであり、そのような同一化の能力の発現は、幼児が一単位となり一人の人間になるために非常に大切であるという。

③独立への方向

幼児は、育児がなくてもやっていけるだけの手立てを発達させている。これは、育児の記憶や独自の欲求の投影や育児の詳細のとり入れが積み重ねられてなされるが、それに伴って環境に対する自信も発達する。ここで付け加えておかねばならないことは、深い含蓄をもった人格の知的理解という部分が発達することである。

幼児が一人の人間となっていくためには、まずは幼児が感知しえないものとして母親からの環境の提供があり、次に母親という存在を知り、それに同一化することが不可欠であることや、一人の人間であるという感覚の成立とはどのようなものかについても詳しく述べられている。Winnicott は、抱っこに関連して「早期の母親側の失敗は幼児のなかにそれに対する反応を引き起こす。この反応が生営みを攪乱し、生の連続性を中断させる反応が繰り返し起こるならば、断片化された存在という一つの型を出発させる一略—このようにして落ち着きのなさ、運動過多、注意集中困難（後に物事に集中できないという症状となる）の起源となる早期の要因（おそらく生まれて最初の数日、または数時間からはじまる）が生じるであろう。」と述べるが、これらは発達障害的心性とも結びついたイメージである。幼児が母親の存在を知っていくプロセスや、一人の人間になっていくプロセスは、子どものセラピーのみならず、そのようなテーマを持つ成人のカウンセリングにおいても、他者の存在を知っていくことや、自己感を得て行くプロセスに重なる点があるように思われる。

2, 近年の精神分析的アプローチにおける「非二」の発達

Meltzer は、心的次元論を展開しており、その中で自閉的心性に触れている。四次元性は、健康な状態であり他者とのコミュニケーションは成立する。投影同一化、摂取同一化がともに機能し、心は他者からのメッセージを感じるだけの空間性を有している。それに伴う時間の機能も適切に作動する。三次元性では、摂取同一化ができず、過剰な投影同一化に支配された世界であり、一方向的なコミュニケーションが展開される。これは精神病水準である。しかし、感じたり考えたりすることができる空間であるのが、三次元における空間の特徴である。発達障害水準では、二次元的な平面性が想定される。三次元での空間にあるような、考えたり感じたりする空間が存在しない。平面的な「こころ」には感じる情緒的な体験をする空間がなく、彼らは表面的特質へ張り付くことで一体感を感じられるよう対応する。この投影同一化が機能せずに二次元性に張り付いていることを付着同一化と定義した。さらに模倣もなく、全く外的世界との関係を作らない中核的な自閉症は、平面もなく直線的な関係の中で生きており、象徴形成などの心的活動を行うことは一切できないため、マインドレスとして述べた。マインドレスの世界には、関連性や時間的連続性は存在せず、断続的に出会う経験しかできない。自我は一瞬の最も刺激的な対象に接触するだけに過ぎない。そのため、注意は瞬時に変化し、一時停止しながら焦点の定まらない感覚の世界を生きることになる(木部2006 p.58-59)。

四次元性はエディプス構造を有する神経症圏、三次元性は、Balint が言うところの排他的二者関係的世界であり、他者は意識されてはいるが、うまくコミュニケーションはとりにくい状態であろうか。二次元性、一次元性は、他者が明確には認識されてはいない状態であると考えられるのではないだろうか。

木部は、Meltzer との関連では、一次元性—広汎性発達障害児(カナー型

自閉症)、二次元性を自閉傾向など象徴形成の不全に基づく混乱した精神病児、三次元性—被害妄想を中心としたスキゾフレニック児(小児統合失調症)、四次元性—神経症圏という関係を示している(同 p.138)。しかし、二次元性については、次のビックの理論に当てはまる場合、つまり自閉傾向ではあるが、自閉傾向に基づく混乱した精神病児とも言い難い状態も含まれるのではないと思われる。ビックの理論(同 p.65)では「適応は程よく、精神分析の必要性が乏しいのにも関わらず、治療的展開が認められない人々であり、彼らの分析での特徴は、摂取の困難さばかりでなく、投影もほとんど使用しないことであった。彼らの関係性は紙のように薄く表面的で、価値観も常に外的対象や人物に依拠し、決して内的原理に基づいて算出されなかった。こうした内的価値、内的世界の欠落は、彼らを常に他の人々の動向に目を配り、模倣に終始させるように導いた。子どもでは、この現象は施設で生活する子どもたちの行動にしばしば認められた。彼らは妙に馴れ馴れしく身体接触を求めたかと思うと、その対象が不在になれば、悲しむこともなく、他の対象に同じように接触する。そこには心的結びつきはなく、ただ表面的な関係しか存在しない。不安は情緒的体験として感じられることはなく、そこにおいては対象を取り替えるという行為で不安が処理される。」ビックの理論は60年代で古いものであるが、病理が重いわけではないが、関係性の薄さ投影や摂取の困難さ、関係性の成立しにくさや転移の生じにくいことなど、これらの描写は従来の心理療法が通用しにくい現代において多く出会う心性とも共通している点があるように思われ興味深い。ビックはこうした現象を自己愛同一化の障害と考え、皮膚機能にも関連した、投影同一化が活発に作動する以前の状態における防衛として「付着同一化」という概念を提唱した。ここでの愛着関係はパウルビーが述べた単なる恣意的な愛着行動であり、心の絆としての愛着とは別であると言え、ギーゲリッヒの言葉に照らすならば、偶発的な運び手(accidental carrier)に自分をつなぎとめる Dock が機能しなかった状態と言えるだろう。「非二」という観点から見ると(橋本2017)、Meltzer の論

の二次元性と一次元性が、ともに他者が明確に成立していない状態といえ、「非二」であると考えられるのではないか。

またビック(同 p.64)は、最早期の乳幼児期においては、境界として機能する皮膚によって、パーソナリティーの諸部分が束ねられる必要があるとして、この皮膚の内的機能が母親という外的対象の摂取に依拠するとした。母親からの抱っこや言葉、香りなどが皮膚に同一化(摂取)され、適切な皮膚の抱擁機能が確立される。皮膚の抱擁機能が適切に確立されない限り、内的外的空間は存在せず、投影同一化も作動することはないと述べる。皮膚の境界としての機能は、Winnicott が自分であるもの(内側)と自分でないもの(外側)の区別として、一人の人間としての誕生に欠かせないと描写したものとも重なり、これらの確立をもって、二者関係への参入として考えられるだろう。よってそれ以前の段階を「非二」の状態ととらえられるのではないだろうか。Winnicott の言う一人の人間として生まれていない状態、心的未生性(田中2017)といえるだろう。

Tustin は自閉症の成因を母親からの早すぎる「分離」による外傷体験一分離した対象関係が未だに成立していない段階での対象喪失による—と考えている。自閉症児と母子の病的合体、区別のなさ、自閉症児が母親との間に感じている一体感を、Meltzer の「付着同一化」よりも強く「付着単一性」と名付けた(木部2006)。そして早期の心の形成について Bion (1962)を引用している。「母親は乳児が示す様々な振る舞いの意味について思いをはせ、乳児に反応していく。乳児はこのようなやりとりを通じて、自分の振る舞いの意味、そして心を形成していく。このときの母親の活動を Bion は夢想と呼んだ。夢想は Bion の言うアルファ機能の具体的な姿である。」母親の心が乳児の心を形成するためにはまず自由に夢想し、乳児を心があるものとして扱い、その心を思うことにより、乳児の心が形成されるのである。また乳児が他者としての母親に気づくことをTustinは以下のように述べている。「母親は没頭しつつ距離を保つ、すなわち共感することで、乳児の痛みをやわらげることができる。母親は乳児の世話をし、

きちんと身づくろいし、排泄をさせ、徐々にこれらのことを乳児が自分でできるように助けるのと同じように、乳児が自分の心を育てるのを助けるように思われる (Tustin 2005 p.70)」。

Tustin は、自閉症児の発達について「普通の人間との同一化は、体の中身や身体的過程という点で作られた普通でない対象への同一化のかわりに、起こりはじめる。人と「もの」との間の分化がなされる。そうして身体的分離性の痛みに耐えることのできる母親の取入れやそのような母親への同一化が起こりはじめる。そのとき母親は、生きている人であり、考える人であることが認知され始める。このようにして、表象を用いスキルを使用する能力が発達する。夢が無意味な発散や体の動きにとってかわりはじめる。生来的な形は思考や空想に変形されはじめる。私たちが知っているような心が始まる。子どもはまず、心理学的に生存可能になり、その後にしかりとしたまとまりをもつ(containment)」と述べている。分離への気づきの意味について、「分離性の気づきは空間の気づきと不可分であり、それとともに外部と内部の気づきがもたらされる。口の内部が身体の内部分の最初の体験であるということは、もっともなことであるように思われる。「内部」の気づきが達成されるまで、内的生活はありえない。E.S.A. の子どもたちは、分離性の気づき、そして空間の気づきと内界と外界の気づきを抹消してきたが、それによって彼らは、ほとんどあるいは全く内的生活をもたない。そのため、彼らは、空虚で虚ろであるという印象を与えるのである (同 p.130)。」分離性が内部、つまり心的空間の生成にも不可欠であると述べている。

Alvarez は乳児の母親を「赤ちゃんの関心を得ようとしはじめ、その関心を持続させるために言葉と愛撫を増やしたり、強くしたり、拍車をかけていく。そして赤ちゃんの関心が遠のくと、次から次へとすることを変えたり、刺激をなだめに変えたりと、常に即興的な対応をする。これが生きる仲間(live company)なのである。(2006 p.80)」と描写し、母親が乳児に注意を喚起させ、覚醒させ、活気づける部分に注目した。そして従来の中立

性、受動性だけでなく、能動性という新たな治療態度が二者関係成立以前の子どもの心の再生には必要であるとする。また「自閉症の子どもに欠けているものは、心の理論ではなく、人についての理論(theory of human), すなわち、世界の中に興味深い他者が存在するという感覚である、と捉えた方がよいのかもしれない。(同 p.74)」とも述べている。Winnicottは「共に生きる他者としての母親」という言葉で、幼児の二者関係への参入にあたっての母親の存在を述べたが、Alvarez は、興味深い他者が存在すること、生きて考える人であることが認知されることなど、他者が生きていること、自分とは別の心をもっていることへの気づきということがない状態を自閉症児の特質ととらえており、その状態から活気づけ注意を喚起し、他者を発見させるところに焦点が当たっており、やはり自他の分離が非常に意味を持つ領域と考えられるだろう。

Balint も自身の創造領域の概念が Bion のアルファ機能と類似していることに触れているが、Bion の前概念や思考についてのアルファ機能、ベータ機能の概念は、様々な治療論に広くヒントを与えるものとなっている。以下に整理しておきたい。

思考について Bion は、「前-概念(pre-conception)と現実化(realization)」ということを述べる。出生時の赤ん坊は、乳房や顔の前-概念を持って生まれてくるとした。そして実際に会うと(現実化)、概念化が起こる。そしてこれが繰り返される中で概念が形成される。これはものごとの連続性(linking)が満足のいく体験の元で破壊されていないこと、そこではアルファ機能が正常に働いていることを示している。アルファ要素とは、Bion が発生論的観点からの思考 thought の形成と発達の中で、主体に意味合いをもたらす思考であるが何らかの形で意識的に認知されるその前段階の水準にあると位置づけた思考のことである。アルファ要素以前の、主体に理解されないままにあるもの(思考)をベータ要素と名づけている。ベータ要素は精神分裂病者の思索において体験されるものであり、妄想や幻覚の基盤となる。このようなベータ要素、つまり感覚データをアルファ要素

に変容させる精神機能を Bion はアルファ機能と名づけた。この機能は赤子への母親の夢想、分析家のコンテイングとして具現化される。(精神分析事典 p.177 p.11 2002)

3, Jung 派における「非二」の発達

Jung は、「二への分割は、潜在性・可能性の状態である一なる世界をリアリティーに移行させるためには必要不可欠であった。リアリティーは諸物の多様性によって構成されている。しかし、一は数ではない。二こそが最初の数である。そして、その二をもって、多様性とリアリティーが始まるのである」(CW14, par.659)と述べている。このことに関連して河合(1988)は、「一が一であるかぎりわれわれは「数」ということを意識するはずがなく、何らかの意味で最初の全体的なものに分割が生じ、そこに対立、あるいは並置されている「二」の意識が生じてこそ、「一」の概念も生じてくると考えられる。二はこのように分割、対立を仮定するものであり、葛藤と結びつきやすい。このような意味で、二は影の問題と関係の深い数である。定立するものと反定立するもの、このダイナミズムから新しいものが創造される。」と述べる。二という数が意識と関わっているといえる。Jung は「二の出現が非常に衝撃的であるので、多くの言語で、他方(the other)という言葉と第二のもの(the second)は同じ言葉として表される」とし左右、好悪、善悪など、「他方(the other)というのは、悪意や嫌悪、あるいは少なくとも、何か正反対のものであり異質性を感じさせる」(Jung, C, G 1969, cw11, par.180)と述べている。このことから、二の出現とは、文字通り他者の出現と考えられる。逆に、二が出現しない状態とは、他者が出現しない世界であり、一の概念自体も意識されないといえる。これらは、Winnicott やギーゲリッヒが、新生児が最初は母親という存在自体を意識していないと述べるのに等しい。自分と母親という二がなく、そこから意識される自分、あるいは他者としての母親という一自体も意識さ

れてはいない状態である。当然、Jung が人格の発達のプロセスで述べた影も出現しないままとなる。何らかの形で分割、分離が生じて二が発生してこそ、一が意識されるのである。Jung は具体的な母子関係からはそのことを述べてはならず、錬金術の視点から、分離や分割というイメージで述べていることが特徴であろう。

逆に考えると、必ずしも母子関係的な世界の中で二を体験せずとも、イメージのなかで生じてくる二の世界、他者との出会いなど、二のイメージに広がりが見られることも特徴であると言えるだろう。二が多様性とリアリティーの始まりであるというのは、「非二」の状態というのはリアリティーや多様性—これは様々なあり方ということで、それぞれが持つ個別性とも考えられる—に開かれていないといえる。それは全体性のままであるとも言えるのかもしれない。まだ匿名的な世界に生きており、具体的に自分であることや他者であること、それらにそれぞれ名前があり、リアルに存在していることから遠い世界であり、新生児にとっての世界は最初はそうであるように、全体がぼんやりとしている世界に生きている状態が推察される。そこからいかに分離や分化が生じていくのか、その生じ方に錬金術師(セラピスト)はどのような影響を与えるのかをイメージレベルで追及していったのが Jung の特徴であるといえる。

①ウロボロスとしての「非二」

Samuels の「ユングとポストユングアン」(1990 p. 260-273) では Neumann による意識の発達に触れている。Neumann は①ウロボロス段階②母権的段階③父権的段階としてイメージで述べている。それぞれ対象の非存在、二者関係、三者関係と考えられる。

①ウロボロス段階

Neumann は、乳児の最初の一年が終わる頃に第二の心理的誕生が起こるとする(また子どもが一般的な文化に入る時に第三の誕生が起こるとも述べてい

る)。彼はそれ以前の早期の段階を子宮外胎児段階と呼ぶ。この考えに従えば、子どもはまだ一個の人格として十分に形成されておらず、自己は母親の胎内の羊水に漬かっている状態として理解するのがもっとも相応しいということになる。Neumann の考えでは、発達さまざまな段階は元型的に条件づけられており、元型的要素を受け入れるものとしての環境には相対的に言ってほとんど強調が置かれていない。発達の最初の段階はさらに非自我(non-ego)あるいは前自我(pre-ego)として特徴づけられる。Neumann はこの意識発達の最初の段階を、自分の緒を嚙んでトグロを巻いている蛇という古代の象徴にならって、ウロボロス期と呼ぶ。ウロボロスとは、「自らを殺し、自らとつがい、自らをはらませる。男でありながら女であり、はらませる者でありながらはらむ者であり、飲み込みかつ生み出し、能動的でありながら受動的であり、上でありながら下である」(Neumann 1954 p.10)ウロボロスは、子ども時代や幼児期全体の表象ではなく、その時期に特徴的な意識の状態の表象である。ウロボロスは、幼児的な万能感、唯我論、意識分化の相対的欠如を一息にとらえるイメージである。母親を持っていることの否定であり、境界の感覚の欠如でもある。最初の時期の状態としてウロボロスは特殊な形の退行を呼び覚ます。これは、一方では無意識への憧れと、他方では創造的な母親と一つになりたいという欲望と源泉を同じくする。また Neumann は、母子関係を「原初的關係(primary relationship)」と呼び、子どもが母親に全面的に依存していると特徴づける。子どもの自己保存本能はこのきずなを維持させようとする。母親の体は、子どもがその内で生きる世界であり、もっとも早期の段階では、子どもには「身体自己(body self)」しかないと言ってよい。この自己はいずれにせよ、原初的な胎児的關係の内にとらわれている。これはさらに「二人で一人(dual union)」と記述される。そこでは母親と子どもは客観的には別々であるが、心理学的には一体として機能している。母親が子どもから一人の人格を持つ個人として見られるのは、最初の一年が終わる頃になってはじめて現れる。Neumann は母親と子どもの神秘的参与を、誕生

の時からすでに存在していて、誕生の後で獲得すべきにかではないと考えている。これは現代において愛着が成立しにくい等の自閉的特徴が生じることの背景に脳の機能に生得的問題があると考えられている説とも合致する点がある。彼はまたこどもの発達のコントロールや調整が初めはもっぱら母親の側からなされると述べている。母親の側からの一方的な環境の提供という点では、Winnicott と同じであるが、Winnicottの方がもっと母親のこの時期の具体的な機能に重点を置いているといえる。それに対し Neumann は、本能的側面を重視していると言えるのではないか。

②母権的段階

ウロボロス期に続いて、子どもは母権的な発達段階と父権的な発達段階を経験する。母権的段階の根本特徴は、「存在の連続性の中に匿われているということ」(1973 p.39)である。二者関係が次第に発達して、それが以後のすべての人間関係の基盤となる。ウロボロスが覆い隠していたのは母親と子どもの二者性であった。母権的段階ではこのことがもっとも重要になり、ネガティブな経験を統合する能力もそこに含まれるようになる。自我による最初の行為は、母親と子ども、次には母親と父親を分離される攻撃的な空想を用いることである。その後、他の対立物の対が現れてくる。かつては融合しあい、一つであったものがこのように二つの対立物に分かれることによって、意識はさらに発展する可能性が生じてくる。この発達は二つの心的内容が結合しあうことによって第3の新しいものが生じるという Jung の古典的な記述の線に沿っている。Neumann が言うには、これらの分化をなすことは一つの英雄的行為である。「世界を創造し、対立物を分離するという英雄的行為によって、自我はウロボロスの魔圏から外に踏み出し孤独と不和の状態に入る」(1954 pp.114-15)。

そこから統合的自我が形成される。これは生まれてから一年が経つまでは存在しない。

③父権的段階

Neumann は父親の存在を説明するためにアニムスという Jung の考えを用いる。アニムスは初めは母親の男根的側面に見られる。これはアニムスがまだ大いなる母に従属しているということを意味する。次第に父親の姿が現れて来るが、しばしば家族内部での精神的価値を体現する理想的存在や保護的存在と見なされる。乳離れは、文字通りの出来事以外のものとして受け取るならば、これら二つのきわめて異なった段階間の移行を表わしている。

意識の発達について、まずはウロボロスという混沌状態があり、そこから母親と赤ん坊が二者に分かれること、その後父親の区別がついてくことなど、分離や分化が非常に意味あるものとされていることがわかる。子宮外胎児段階などは、ギーゲリッヒの論とも近い。Neumann は、意識を発達段階的に生まれるものと捉えてはいるが、ウロボロスがある種の意識の状態であり退行でもあると考えられているのは、二者関係以前でもあり、また二者・三者関係を生きていてもウロボロスに相当する意識の状態は存在し得るという意味でもあり、必ずしも不可逆的な発達として一度ウロボロスを脱したらそこには戻ることがない発達的前二者関係というよりも、発達の視点を超えて、「非二」の状態と捉えることもできるであろう。

②Self-agency(自己主体感)・リズム

近年の Jung 派から、Bisagni(2010) は、Bion の前概念や Jung の元型の概念が、自閉的な子供との治療において非常に有用であると述べる。原初的自己を、Bisagni は、対象との遭遇における自己の本質的にリズムカルな性質として、より力動的なあり方と理解している。そしてこのような考え方は、原初的自己を十分な成熟を遂げていない(unsaturated)ものとみなす。自己感は、関係の相互作用の結果生じるものとみなしている。Bion の前概念と同じく、獲得された元型は、より基本的な形においては、さら

なる対象との遭遇に開かれた未完成な要素によって構成されており、象徴化への道を歩むのである。対象の在不在のリズミカルな相互作用は自己感の基礎が創造されるときに核になると述べる。Alvarez が、Bion の思考の概念を拡大し、思考が不在によってだけではなく、存在のあり方の変化—柔軟であったりはっきりしていたり、あるいは、対象の破滅的ではない変化—によってもまた生み出されると述べたことも参考にしている。存在が変化することと一定であることは、幼児にとって不在を通じて対象恒常性が維持されることに先立つものであるとする。

また、母子関係において、Meltzer の述べているのと同じく、言葉以前のリズムを重視している。リズムは、母親と乳幼児の相互作用であり、成長を分かち合うものである。タイミングや音と詩の韻律は(treverthen et al 1996)、変化するものの姿を構築していく要素であり、基本的信頼の内在化である。自閉状態の患者ではこのようなリズミカルな性質が、それが明らかな原因論ではないけれども少なくとも非常にダメージを受けている。自閉症児の母親にとって、そのようなリズミカルな相互作用において対象を再生(reclaim)するという母親の役割—彼女の主体性のあらゆる複雑さを伝える—は最も困難なものである。自閉状態の子の母親は、生き生きと活気づけ、ばらばらなものの連続性を受け止めるという能力における原初的弱さがある。その結果、赤ん坊の対象と関係する能力の弱さにつながると述べている。

Knox(2011)は、Self-agency という言葉で、神経生理学や愛着理論、精神分析理論などを縦横に駆使して、自己主体感について述べている。単なる自己や主体というよりも、agency という言葉が使用されているように、身体感覚、愛着理論、神経生理学、精神分析や心理療法などの力動的関係性など様々な側面が複雑に内在化され作用しあうものとしての意味合いや、常に生成されていくものであるというプロセス的視点が含まれていることが特徴であると言える。自己主体感は、Winnicott の言葉に照らすならば、人間としての誕生に必須であり、自分自身が主体であるという感覚である

といえる。その中でも、Knox は、身体的な自己主体感が、感情的で心理学的な自己主体感覚 I-ness の経験にとって、中核的で基本的なものを形成すると述べる。身体的な体験が直接象徴的な意味や概念的思考を創造し、行為者としての感覚を意識の流れの中で生み出し、ある経験を体験している主体である感覚となると述べる。Knox によると、無意識的な自己主体感、自己と他者の力動的な関係性、内的ワーキングモデルが内在化されたものである。また神経生物学は、乳幼児期の右脳の十分な発達、自己主体感を維持する中心的役割を担うことが報告されている。しかし人間の脳新皮質の学習プロセスは、文化的、社会的、対人関係の体験などに大きく依存しており、それらが個別的自己において鍵となる役割を演じる。つまり脳の機能だけの問題ではなく、そこには相互作用があり、後の文化までを含む広い意味での学習が脳機能にも影響を与え、個性が形成されていくと述べている。

また言語を、アイコン、目録的(indexical)、象徴的なものの3つに分類した Deacon を引用して、言葉とコミュニケーションを理解しようと試みている(p.111)。例えば、乳児の泣き声は一つのアラームであり、それによって両親は急いで駆け付けることができ乳児の生存に必要な反応を引き出されるように、目録的なコミュニケーションのパターンは、乳幼児にとって重要な意味を持つ。これは、生後間もない乳児にとって、関係における自己主体感覚の具体化された(まとまった)経験である。対照的に、象徴的なレベルでのコミュニケーションでは、他者の反応を引き出すことだけではなく、自由にそのコミュニケーションを象徴的に反省できる。自己主体感覚が目的論レベルである時のメルクマールである思考-行動連結(thought-action fusion)の経験はそこにはない。つまり目録的なコミュニケーションでは、必ず自身が発したものに対して行動や感情的インパクトとして反応が返ってくることが重要なのであり、気持ちを受け止めることや内省などの内的スペースがない状態であると言えるだろう。

これを分析的理論と実践にとっても重要な意味をもつものとして、

Knox は感情的コミュニケーションにも拡大して適用している。もし目録的コミュニケーションが、成人の生活の中でも固執されるのであれば、患者の自己主体感は目的論レベルに固着しているものであり、彼らは、直接的な行動や感情的なインパクトを分析家に与えることを通して初めて現実を感じるだろう (p.113)。

このマインドレスの防衛的な状態の背後には、発達のなみずみがある。それは超越機能の抑制であり愛着理論でいうならば、目録的コミュニケーションから象徴的なコミュニケーションへの動きが妨げられたといえるだろう。子どもの自己主体感の発達は生存に必須であり、直接の身体的行動的なインパクトを世話してくれるものに与えることができる能力に依拠しており、それに対する完全な反応が人生の最初期の数か月において決定的な意味を持つ。世話してくれるものからの予測可能な反応を創造するという反復される体験を通して、乳児の目的論的な自己主体感は発達するからだ。Deacon の言葉を使うならば、これは目録的コミュニケーションを信頼することであり、自分の発する信号によって他者からの予測可能な反応が保証されることである。この段階では、Winnicott が指摘したように、母性的な反応を創造するという母親の役割を乳児が幻想できないことは、乳児にとって破滅的である。

しかし次第に分離固体化が進むにつれて、ともにいるけれども別の人間である世話する者に、感情的な反応を求めるようになる。そうして乳幼児は、彼ら自身の欲望が彼らを理解する他者の心—幼児と世話する者の両方の意図を反映した反応—にコミュニケーションされることに気づくようになる。この段階での完全な反応は、意図的な、反省的な自己の発達にとって失敗である。なぜなら、もし完全であるならば、他者との対話の経験や、異なった心があることなどが経験されないからである。もし母親が、反省的機能を持たないならば、—基本的に自分自身やその赤ん坊が別の心や感情を持っていると感じることができないならば—、彼女はただ目的論、目録的なレベルに関係することができるだけであり、乳児が分離固体化へのプロ

セスを歩み始めてからも、完全な不随的反応、乳児との同一化にとどまるだろう (p.139)。

乳児にとっては世話を引き出す、親にとっては世話をするということが決定的な意味を持つ段階が目録的コミュニケーションであり最早期の発達であり、そこから象徴的意味や心を創造する段階への移行が必要であると述べている。

4, 「非二」の治療論

①病態水準と発達障害的な発達における経過のゆらぎ

本部は、児童の心性を①神経症圏③精神病圏④自閉症圏として大枠に分類している(前掲書 p.137)。また、神経症圏と精神病圏の間に曖昧ではあるものの、②境界例圏という概念が必要であると判断しており、自閉症児の発達経過として、精神病圏としての発達形式だけでなく、強迫神経症、あるいはまったく自閉症の痕跡が認められなくなる場合もあるためとしている。この論からは、自閉症圏における症状やその変遷が非常に広範におよぶものであることが伺える。おそらく重度の自閉症から軽度の発達の偏りまで含んでおり、その発達変化も、個々の例で大きく異なることが推測される。現在の症状からのみでは予見しにくい側面があるということであろう。自閉的な患者の発達のプロセスにおける変容について、自閉的状态から精神病的、ノーマル、自己愛的なモード間のダイナミックな揺らぎを認識することは有用であり、異なったタイプの不安に応じた異なったレベルがあり、常に mind と non-mind の状態を行ったり来たりする様子がしばしば観察されると Jung 派分析家の Bisagni も述べている (Bisagni 2012)。また衣笠により「重ね着症候群」(2008)として、表面に様々な病態の衣をまとうため、中核にある発達障害という本質がつかみにくいなどの特徴なども指摘されている。このような状態の変動や予見しにくさは、病態水準的理解が有効に働かない事例があることを示唆しているようにも思われる。

そのような中でどのような治療論が展開されているのかを次にみていきたい。

②精神分析的視点からの治療論—セラピストの能動的関わりの必要性、詩的能力、逆転移の利用

「心的誕生以前」の状態ということであれば、何らかの形で心的誕生を果たすことが心理療法における一つのメルクマールにもなるであろうし、そのための関わりが必要となる。すでに心的誕生を果たし、二者関係、三者関係という現実を生きるものへの心理療法とは異なるといえる。

木部は、被虐待児、発達障害児に共通した心的状況は、投影同一化の障害であり、混乱のために対象との非分離の状態を呈していることである。つまりクラインの活発に投影同一化、摂取同一化を行うことのできる乳児モデル以前の状態である。したがって、従来の受動的態度と解釈技法だけでは、不十分であると考えられるようになってきている述べる。

Meltzer は、治療構造の維持を重視し、精神分析的態度は精神分析過程が動き始めるための条件とした。Meltzer の言う精神分析的態度とは、「私はあなたの分析家、別の人物である。私はあなたを受け入れるが、あなたの投影によって支配されない。それゆえに、今でも自分自身で考えることができるし、自らの思考であなたとコミュニケーションすることができる」つまり分析家は独立した存在として機能しなければならないということ、分析家はその手がかりとして逆転移を十分に使用しなければならないということを指摘している。この逆転移を理解する能力を、特に Meltzer は「詩的能力」と呼んでいる(木部 p.58, 59)。

Cassese (2005 p.19-20)によると Meltzer は「定式化された解釈」と「直感的解釈」を区別している。熱意と距離(1976 p.29)の論文では、技法的な工夫において、探索的解釈について、それは解釈と分析状況のより創造的な側面であり、患者と共に浮遊する思考を表現し共有することにその本質があり、その目的は「患者と同様に分析家の中にもある無意識的直観のプ

ロセスがより幅広く機能するために、素材を豊かにすることを促す」(1976 pp.376-377)と適切な解釈ではない側面が持つ意味について述べている。また関係の中では調子やリズムや音量という分析家の声という音楽的要素を調整することによってコミュニケーションの熱意や関係の情緒的雰囲気を作り出される。定式化された精神分析用語ではなく、セラピストの感受性や個性、創造性がより生かされた関わりや言葉、声が必要であるということではないだろうか。

Alvarez, A は、母親の包容という機能だけでなく、乳児に注意を喚起させ、覚醒させ、活気づける部分に注目した。従来の中立性、受動性だけでなく、能動性という新たな治療態度が、こうした子どもの心の再生には必要であると考えられるようになった。「自閉症の子どもの社会的技能の訓練はある程度役立つかれども、その能力があまり般化 (generalization) しない(2006 p.12)」と述べている。心のより深層の構造を変化させることで、より般化が促進され则认为している。また「我々は人間的感情やコミュニケーションの世界に彼らを『引き出す』活動をしなければならない。逆転移の利用によって、セラピストは自分のごく小さな変化が患者の変化を引き起こすことがあるのに気づく。そして、それによって、より積極的に患者に関われるようになるのである。」(p.13)と逆転移の利用についても述べている。そして自閉症児らが他者の身体を自らのもののように使うことを例に挙げ「彼らは人の手が行う機能を求めているのであり、その手が誰のものかはいつでもよいのである。親たちは子どものこうした要求を何気なく先読みしてそれに応じてしまうので、結果的に、子どもも親もより生き生きした交流を持つ可能性が失われていることに気付かないままになってしまう。援助を求めることと、それに応じることは、相互性を強化する経験であり、一方、人の顔も見ないでその手を握むことは、著しく人間性を失わせる経験である。」と身体的にも自他未分であることがいかに他者の存在、他者の心への気づきを持たない行為であるか、そして日常の中でそれを当然のように受け入れてしまうことが積み重なることの危険について

述べている。「このように情緒的に気落ちするような体験が繰り返されると、親は普通の人間としての温かさや自発性を喪失しかねない。そのため、結局、十分考えることなく反射的に手を差し出してしまうかもしれない。親は、それ以上の期待も要求もしなくなるのである。サイコセラピストも教師も、このような自発性の消耗を感じるので、安易な解決法に流れる傾向を克服する努力が必要になる。」発達障害的な人物と関わる時に感じさせられる消耗感、無力感について述べられており、これは教育者、セラピスト、親が陥りやすい感情であること、安易な解決法に流れることで、発達障害傾向がそのままにされてしまうこともあるということが明確に述べられている。

また彼らがどのように世界を経験しているのかを理解するには、「観察と、セラピストの逆転移を利用することが重要である。この方法は、すべての精神力動的アセスメントの中核であるが、特に言語をもたない子どものアセスメントにおいては、より大切である。(p.20)」 「自閉症児は感情を普通のやり方で投影しないので、意味のあるコンタクトをもとうとすれば、より積極的な技法が必要になるのだ(p.21)」

「我々は患者の反応と同様、自分自身の反応もモニターし、たった今自分が何をして何を感じていたのか、あるいは何を感じず何をしなかったのか、ということを中心にとどめておかねばならない(p.73)。」そして自身の事例について、「ロビーの場合には暗い闇の底(あるいは、他の子どもの場合には、穏やかな永遠の休息場所のような心地よすぎる場)にいるのを見つけ出してやること、そしてしっかりと絶え間のない注意を注いでやることによって、私は、彼らの見つけ出してもらう必要性に応えることができるのだと考えるようになった(p.79)。」見つめ、注意を注ぎ続けることにより、彼らの存在を見つけたことが可能であると述べている。そのために「必要な強さの注意のレベル(多分、Winnicott のいう初期の母性的専心)」があるのだという。Live company としてのセラピストの姿であろう。

また「積極的なアプローチは、自分で命を取り戻すために助けが必要な

受け身的な患者を、命ある世界に誘い出すことを必ずしも意味するのではない。むしろ、ほとんど植物状態の患者に命を吹き返させようと、名前を呼び続けることに似ているだろう。」と述べている。これは命ある者が緊急事態として瀕死の状態に陥り命を取り戻すことが必要というよりも、生命力の不足が慢性的な状態、植物状態に近いところからの回復のためにセラピストが諦めずに名前を呼び続けるというイメージであり、自閉症や発達障害の治療におけるセラピストや親や教師の関わり方においては、根底にある生命を呼び戻すような、時間とエネルギーが非常に多く必要なことを示しているように思われる。

また発達障害の治療についての一つのメルクマールと考えられることも述べている。「(治療者は)この子どもが何を、なぜしているのかと、ある種の考えをまとめあげることができるだろうか？そしてその子どもは、何らかの反応を期待して、物事をするようになってきたか？ランダムなように見える行動が構造をもちはじめているか？遊びの中に意図の芽生えを見出せるか？他の患者に対する心理療法的アセスメントと、このアプローチとの技法的な違いは、子どもが心をもった状態とは言えないようなときに、セラピストが関係を結ぶために先導し、そこに意味をもたせてやるという責任を取る点である。(p.28)」ばらばらだった患者の語りからイメージがセラピストの中でまとまりを持ち始めたり、意図や反応への期待という他者からの照らし返しを期待したりするのをセラピストが読み取ったりなど、茫漠とした状態の中に何らかの構造がセラピストによって見出されるということであろう。これは、成人の治療にも当てはまるように思われる。発達障害的心性では、田中(2017)も述べているように、覚えていませんやわかりませんという言葉の多さ、また語られる内容がばらばらで非常にわかりにくかったり、患者自身の語りからイメージがセラピストに伝わりにくいのが大きな特徴であるが、それらがセラピストにとって少しずつはつきりしてくることは、ばらばらに見えるものの中からあるイメージがまとまりを持って生まれてくることでもあろう。Bionの夢のイメージとも

重なる仕事がセラピストに課されるのだといえる。またそのように意味をもたせることに「セラピストが責任をとる」というのは、子どもや相手に主体性を期待し中立的に存在しそれを受け止めるだけではないセラピストの心のあり方を述べたものでもあろう。

Tustin は、受動的な治療態度だけでは自閉症児とのセラピーが困難であると感じ、生きた存在としてセラピストを認めない自閉症児は、セラピストが能動性を持たない限り、ものとして取り扱うということを実感したのであった。また、セラピー当初には転移も不十分であることから、セラピストの解釈は、セラピストの考える機能を自閉症児の心的装置の一部として供給するという意味を持っていた。

Tustin(2005 p.86)は、養育において欠けてはいけない二つの要素は、「外界からの耐えられる程度の感覚的な刺激を子どもに与えることと、内外からの刺激によって生じる興奮を子どもから取り除くことである。」また「外界から自分自身を分化する際に、そして精神内界上の分化を進行させていく際に、必然的に伴う欲求不満と困難に耐えることができるようになっていく両親、特に母親を必要とする。あまりに柔らかすぎで言いなりになってしまう親は、これらの過程がうまく起こることを妨げ得る。子どもは人生をそこからスタートするためにしっかりとした足がかりを必要としており、それは、人間的な反応のある融通のきく養育なのである。ある種のタイプの母子は「まだら」様に互いを部分的にしか区別していないように見える。」と述べている。鬱的な母親は、過度に柔らかいか、強迫的になるかのどちらかになりがちであると言う。また阻害要因を持つ子どもたちは、過保護な養育を受けやすい。過度に子どもに合わせる養育や場合によっては誘惑的な養育は、過度に長い期間、子どもを自閉状態に留まらせてしまうことになるのであるが、有無を言わせない分離性という事実が子どもに侵襲するとき、それは痛ましいショックな体験としてやってくるであろう。」と分離性の痛み自体が過剰に感じられるような環境についても述べている。

また「このような子どもの母親たちは、子どもからのコミュニケーションにうまく反応できないでいるというよりも、むしろ通常のチャンネルを通さないコミュニケーションにあまりにもすばやく反応しすぎている。つまり彼女たちは、そのような反応様式をとうに放棄すべき時期に、自分の体が子どもの一部であり子どもの体が自分の一部であるかのように、あまりにも「テレパシー」のように身体的なコミュニケーションに反応しすぎてきたのである。これは、子どもが他の人間と触れ合う、より普通のやり方を発達させるのに「怠惰」になる一因となる。セラピストは「魔女のような」傾向を抑える必要がある。(p.173)」これは Alvarez も述べている点である。また、Knox の言う目録的コミュニケーションに留まっていることでもあろうか。これは治療上で考えるならば、治療的共感や理解することという一体性へ向かう方向ばかりが強調されてしまうことの危険でもあるだろう。治療の上で、沈黙のまま共感的に理解し察するのではなく、コミュニケーションを取った上での関わりがいかに大切であるかがわかる。

また「精神病の子どもにとって最もよく助けになるのは、感受性が優れているだけでなく分別があり率直な人による援助である。そのような人は、変に子どもを操作しないし、また子どもに操作されない。そして彼らは素朴で、気取ったりわざとらしくせず、子どもが自分自身や外界ともっと触れ合うようになれることを望むのである。」(p.177)とセラピストのあり方についても述べている。

「子どもは自分自身と、あるいは母親と排他的にぬるま湯のような居心地のよいかかわりをすることで、優しさ(傷つきやすさ)を封じ込めてしまっている。自閉状態にある、このような子どもは、優しい気持ちを引き起こさない。」分離して二人という意識、別であるという意識が生まれな限り、子宮の中にいるのと等しく、優しさや傷つきやすさもうまれないということであろう。「セラピストと子どもは、感じやすく傷つきやすい領域は、つながりが切れ、欲求不満と切断を生み出してしまうように見えるが、そうではなく、そこで触れ合いがもてるのであり、得られるものが大

きい領域でもあることを学ばなければならない。」「誰にも傷つけられない状態であるということは、誰ともコミュニケーションできない状態であることを意味する。コミュニケーションしないことで、傷つかないことを維持できる。」と傷つかないこと、つながりが切れる体験や欲求不満の体験がないことが、いかにコミュニケーションを障害するものであるかについて述べている。分離による傷が、子どもにパニックを与えることもあれば、その傷がふれ合いをもたらしものともなるのである。セラピストがつながりが切れることや切断を恐れすぎているのは治療は進まない。傷ついたり傷つけたりを恐れ、それを避けようとするあまりにコミュニケーションそのものが取りにくくなる様子は、現代の発達障害的心性を考えるにあたっても大きく意味を持つものに思える。傷やネガティブな感情を避けようとするあまり、記憶自体を曖昧にしたり、なかったことにする様子は、現代の学生相談では特に重い病理ではなく普通に存在していることである。

そしてまた「セラピストが彼らの情動の噴出に耐え、さらに、表現しようもない恐怖だったものに対して、可能なかぎり言葉を見つけてきたことが重要(p.71)」であると、単に分離や傷つくことが意味あるのではなくセラピストがそのパニックや痛みをともに生きること、そこで言葉を見出すことの重要性にも触れている。切断や、分離が持つ治療の意味は従来の一様感を重視する精神分析ではあまり取り上げられてはこなかった方向であり、改めて学んでいく必要があるだろう。

「見ないこと、聞かないこと、用いないことは、対象の存在を否認し、それが「あること(being)」を抹消することである。自閉症児は「自分ではない」対象を消し去る(black out)ことで心的外傷の源を抹消しようとする。このように「消し去ること」が、健忘症の源の一つであるように思われる。(p.200)」これは自閉症児だけではなく、解離ではないのだが、「あまり覚えていません」や「記憶がない」と気持ちや出来事を語れない事例が近年増えていることとも重なる。やはり傷の抹消と関わりがあることがうかがわれる。Tustinの論は自閉症児との関わりから生み出されてきたもので

あるが、近年の自閉症ではないが二者関係へと開かれにくい傾向を有する「非二」を生きる者との心理療法にも非常に示唆を与えてくれるものである。

またピックは、最早期の対象関係の混乱の著しい患者のセラピーでは、治療構造の包容機能、つまり安定した堅固な設定が重要であると結論している(木部2006 p.64)。

③ユング派の視点からの治療論—セラピストの自己主体感を呼び戻すこと、逆転移の利用

もともと Jung は、神経症、精神病を問わず、心理療法におけるセラピストの人間性、個性を非常に重視している点が、他の学派とは異なる特徴としてあると言える。「医師が自分の人格と隠れん坊してる、つまりヤブ医者と思われるのを恐れて、権威、能力、優れた知識などの職業的マスクを捨てることができないかのように振舞うのを見て、どうして患者は神経症的なごまかしを放棄することを学べるのか？」(1921, CW16, par.137)と技法が分析家によって防衛的に使用されることの危険が強調されている。またなまの現在を犠牲にして過去にさかのぼることについても述べ、「治療とは医師の全存在と患者の全存在が参入する、相互作用の産物以外の何ものでもない」(1921, CW16, Par.71)「二つの人格の出会いとは二つの化学物質の混合に似ており、およそ結合のあるところ、両者もともに変容するからである」と相互作用、両者が出会うというそのことを非常に重視している。

このような背景のもと、Jung 派においても「非二」の世界の治療についていくつかの知見が出てきている。先述した Knox(p.116)は、以下のように述べている。「Jung の分析モデルは、分析家は深い無意識レベルで、自分自身の感情的反応を逆転移として使用する必要があることをはっきりと明言している。(Jung, 1966c, par.364-365)」そして、Bright の事例(p.120)を引用している。「患者は、分析家が自分から距離が遠く、感情的な反応がないことに不満を言い続けた。分析家がどのように感じているのかを言

うように迫り、そのことにより分析家はますます頑なに抵抗したい気持ちに駆られた。ついに分析家はその気持ちに耐えられなくなり、自分自身を感じていること—いかに彼女が来るのが楽しみではないか、彼女を憎く思っているか、彼女の要求し続ける強欲さに辟易し、分析を終了したいとさへ願うことがあるか。—と全くの生の感情を爆発させた。患者は数分沈黙し、「ありがとう。死んでいるところから生き返りました」と述べた。」これに対し Knox は、これは、分析家の言葉の内容よりも、彼女が彼の内に入り強力な感情反応を与えているということに意味があり、分析家が死んでいないだけでなく、彼女自身も彼にとって死んでいる対象ではないことが意味があった。このようなネガティブな反応は無反応よりもあきらかによいものと患者は感じていた。彼の暴力的な反応は彼女に自己主体感を呼び戻した。このケースでは分析家からの何らかの反応が非常に意味があるのであり、もし通常の解釈をしていたらそれは彼女に分析家に対して全く無力であるという感情を抱かせたことだろう。なぜなら彼女の自己主体感 は目的論レベルで機能しているからである。セラピストの主な仕事として両者を関係づけ、自己主体感の発達の軌跡を解釈することと、この種の投影性同一視を我々が理解するときに、新たなそして有用な次元を加えるものであろう」と述べている。そして精神分析の Jessica Benjamin の「硬直したコミュニケーションから抜け出す唯一の道として、患者は分析家に悪い部分を担わせることを願い、分析家がそれに耐える必要があるのかもしれない。分析家は傷つくことへの責任を担わされる。この経験を—痛みや恥を味わうことへの責任をとること—通してのみ到達できるものがあるのではないか。(p.120)」を引用し、セラピストの自己主体感について述べる。

Knox は、「分析家は自分自身の自己主体感を呼び覚まし、そうすることで、患者が自身もそうすることができるようになる。分析的な仕事の中心が自己主体感覚である場合に、分析家が正しい答えを見つけようとする罫にはまらないことは非常に重要だ。それは分析家の主体感を否定するリス

クであり、患者の主体感覚を否定することでもある(p.123)」と述べている。これは、河合らが、非定型発達や発達障害での治療において、「セラピストの主体が関与すること」が重要であると述べることも重なる。(河合 2016 p.22)

Knox の「正しい答えを見つけようとする罣にはならないことが重要だ」という言葉からは、逆転移を利用すると言ってもそこには正しい答えはなく、場合によっては分析家が生身の自分自身をさらすような痛みを伴う賭けでもあるように思われる。また先の事例では分析家の反応が非常に暴力的な反応ではあるが、単なる暴力ではなく治療的意味を大きく持つものでもある点などが理解されなければ、単に暴力的返答が意味あるように誤解されてしまう危険もあり、これは技法というにはあまりにも個人的要素が大きいものでもあろう。そしてそのような難しさが、自己主体感覚がテーマになる場合には生じているということでもあろう。

また Bisagni(2010)は自閉症の子どもとの治療で「分析家は、独特の複数の感覚的心的相互作用を活性化する必要がある。それにより、Meltzer が song-and-dance といったように、一歩ずつリズム的な対象を内在化し、信頼と安心を得られるようになる。Bion の前概念と Jung の元型の概念は、自閉的な子どもとの治療では非常に役立つ。一般的にこれらの患者は、象徴化能力の深刻な欠損に苦しんでいる。そしてもし分析的な関係の中で、対象を取り戻すように深い関係に入り、対象が複雑で多元的な要素を持つ基本的な行為を患者に提供できたなら適切に発達し得る。そのような役割は、本質的に付着二次元性同一化—non-mental な平坦な世界—が投影的な三次元的同一化へと変容する機能において本質的なものである。自閉的状态や自閉対象に関するものの使用からより発展的で生きた象徴的な使用への移行に帰着する。そのような変容の動きは、超越機能の元型的働きとして定義できる。その意味でも患者—セラピスト間のリズムカルな要素は非常に重要である。分析家は患者の様々なリズム的表現を一つ一つ重視し、他のばらばらな音や動きから区別することが必要である。対象の存在と不

在という力動的な視点は、自閉的な子どもが心を作っていく能力の発達に関連している。Bion は(1967)は対象の不在において思考が始まることを述べたが、そのような思考は、存在と不在、近さと遠さの間での「今ここ」において現れる。前概念に出会うことが実現することが可能な場所で展開し、そこで主体と対象が出会うことが生じる。分析家がセッション内での相互作用を記述するために何を言うかという内容を超えて、音楽やダンスをする時と同じような状態にいる能力、あるいは適切なトーンの声、韻律における、リズム的な豊かさ、生き生きとしていること瞬間ごとの相互作用は、被分析者の象徴能力の発達に非常に重要である。自閉的な子どものための分析家の努力は、長期にわたりかなりの一方通行である。分析家の心、期待や望みは Non-relatedness や non-life の状態を打ち破るものとして定義されるようなあり方で存在する。

先に病態水準のところでも触れたが、Bisagni(2012)は、自閉的な患者の発達のプロセスにおける変容において、自閉的状态から精神病的、ノーマル、自己愛的なモード間のダイナミックな揺らぎを認識することは有用である。常に自閉的な患者が mind と non-mind の状態を行ったり来たりする様子はしばしば観察される。それらは分析家の繊細な細部への注意を要求する。音楽を聴く時に必要なある種の感受力のように、常に変化するリズム、トーン、明るさ、不協和音が増すこと、単なる騒音、あるいは空虚な沈黙、幻惑や暗闇を聞き取ることが必要である。連続性の中で常に生じる変化を把握するための主なツールは、逆転移に正確に耳を傾けることである。恣意的な判断というリスクはあるけれども、分析家が特別な繊細さを持って自身の心を把握し、モニターせねばならない。」と述べている。

これらいくつかの論と精神分析との共通点としては、分析家の心、逆転移等が非常に治療的意味をもつことであろう。Knox が述べるように、自己主体感が弱い患者に対して、まずは分析家自身に自己主体感を呼び戻す作業が必要である。決まった方法に頼るのではなく、Meltzer の述べる「詩的能力」また Bisagni が述べる「リズム」も、言語の「意味以前」を

重視する視点と考えられるのではないか。Knox は、自己主体感が問題になる患者に対して、分析家が正しい答えをみつけようとするよりも、個性に応じた反応をすることというのも、意味による相互作用ではなくもっと感覚や現実感のある相互作用のためのものであろう。精神分析、Jung 派ともに共通して必要と考えられている側面は、従来の治療理論がカバーできていなかった側面である。従来であれば、分析家の「行動化」「恣意的な判断」ともみなされかねないものを、そのリスクを犯しながらも、ともに重視していく姿勢が治療における何らかの意味を持つと考えられている点は興味深い。

前述したが、Winnicott が「彼女自身として存在し続ける、ある人物の世話と注目」が最早期の乳児の世話には欠かせないとし、“彼女自身として存在する”ということについて、「人間性 The Person を、役割を演じる Acting 人—男性または女性、母親あるいは看護婦から区別すべきである。」と述べるのは、セラピストの人間としての反応が意味を持つこととも重なるものである。セラピストの学ばれた部分ではない部分や個性や人間性が重要な意味を持つということは、技法や理論を学ぶだけでは対応できず、それらを学んだ上で理論や技法、セラピストとしてのマスクの下に自らを隠すのではなく、自分の人間性という部分を発揮する必要があるということであり、個々のセラピストが、自分自身の“自己主体感”を頼りにしつつ進んでいくという難しさを含むものでもあろう。訓練を受けたセラピストとして、また同時に訓練のみでは学びえない“自分自身であること”の両方が必要だといえる。

精神分析、ユング派の分析心理学、ともに逆転移を発達障害の治療への手掛かりにするという知見は共通している。しかし通常の逆転移はあくまで二者関係、三者関係の中で生じるものであり、そのような関係性を前提とできない二者関係以前・「非二」のクライアントに対してセラピスト側に生じる感情を、従来と同じ逆転移と呼んでしまっただけなのか疑問が残る。投影同一視によりセラピスト側に投げ込まれる感情を逆転移とするならば、

そもそも投影同一視の障害と言われる発達障害についての逆転移は成立するのだろうか。また逆転移が成立したとしてもそれは、投影同一視が成立している二者、三者関係とは異なるのではないだろうか。Meltzer が解釈に「詩的能力」や「探索的解釈」という言葉を用いているのは、そのような通常とは質の異なる逆転移からの解釈を表現しようとしたものではないだろうか。

それらの疑問とセラピストの“自己主体感”が大切であるという視点を合わせて考えると、逆転移という相手から誘発される感情、つまりクライエントの状態やクライエントとの関係性に誘発されるものとしてのセラピストの感情のみではなく、もっとセラピスト自身の自己関係的な感情が自己主体感につながるのではないだろうか。クライエントとの関係性の中の存在でありつつ、自分の足で立つ独立した自分であること、この両者の合わさったところで生じるセラピストの“生の感情”に意味があるのであり、それは必ずしも、関係性を前提とした逆転移ではない可能性もあるのかもしれない。Bisagni は「音楽を聴くように耳を傾ける」と述べ、Knox はセラピストが「正しい答えを求めないようとしなことが大切」と述べ、Meltzer は解釈について「セラピストの詩的能力」という表現を使い、Alvarez は「植物状態から回復させる」イメージを語っているが、いずれもセラピストが「積極的に自分の心を自由に使う能力」によって初めて成立するものではないだろうか。「意味が見いだせないところに音やリズムを感じとり」「正しい答えを探そうとするよりも自分自身の感覚を信じて」「詩的能力を働かせて言葉を用い」「植物状態で心が生きているのかどうかも目には見えない状態の人に心は生きかえると信じて」働きかけるのである。いずれも相手との関係性以前の、セラピスト独自の心の世界がもっとも発揮されなければ成立しない側面があるのではないだろうか。クライエントとの関係の中での存在であることと並行して、セラピスト自身が“自分であること”を強く要請されるのが、「非二」におけるセラピーではないだろうか。いずれも、それが正しいかどうかを保証してくれるものはない

く、セラピストが自分自身をそれに賭けていくことしかできないのかもしれない。しかしなおかつ、それは治療上生じてきたものでもあるという点で全く恣意的で治療から離れたセラピストのファンタジーではあってはならないのである。これはセラピストと患者の一体性と分離性がともに同時に体现されなければ生じないことでもあり、Jung の言う結合と分離の結合でもあるといえるのではないだろうか。

以上様々な論を概観したが、クライアントに自己主体感や主体性が弱い場合、つまり人間としてのまとまりや通常想定される心的スペースが想定されない場合に、セラピスト自身の自己主体感や、詩的能力が重要な意味を持つというのは、信頼に支えられた治療関係の中で、セラピストが最も自己主体性を発揮するときに、クライアントは他者としてのセラピストを発見できるということであり、セラピストの主体性は、そのままクライアントにとっての人間としての他者性を担うという点が興味深い。

5、心理療法が前提としていた意識 近代西欧型自己

精神病理学者である広沢もまた、従来の臨床心理学が前提としていた意識に対して、新たな枠組みを提案している。「フロイトやユングが、その臨床心理学(精神医学)の基準とした「こころの構造」とは、近代西欧人の、しかもかなり高度に完成された構造(つまり中心ともいえる核を基点にすべての心的要素が統合されているイメージ)を持ったものであった。自ら理性を引き受ける強い意志と、一定の自己構造をいかなる場合にも維持する強い姿勢が常に必要となる。臨床心理学が暗黙の基準とした成人の自己像とは、このような強い意志と姿勢を強いられる文化で形成され、適応的に機能しやすいことは、強調しておく必要がある(広沢2015 p.20, p.37)。従来の心理療法は、広沢のいう近代西欧型自己を前提として成立してきたといえる。武野(2010)が、従来のしつかりとした自我を前提とした精神療法が通用しにくいというのも、このような近代西欧型自己を前提としたモデルが現代

では通用しにくいということであろう。さらに広沢は以下のように述べている。「近代西欧型自己の特徴をまとめておくとそれは、自分の核を中心に世界を眺め、しかも全体として常に一定に統合された構造を持つ。それは常に理性をもとに対象を判断し、行動を行うことが期待され、そのためにも常に対象に呑み込まれぬよう一定の距離を保ち、常に一貫した機能をはたすことのできる構造といえる(p.22-23)。しかしこのような構造と機能をもった自己像は、本来、高度に完成された一種の理想像であり、これを維持するには相当のエネルギーを要するものなのであろう(p.23)。Freudが注目した意識—無意識の葛藤という理論も、このような自己を対象にしたからこそ生まれ、またこのような自己像(機能と構造)だからこそ妥当性を持ったのではなかろうか(同 p.236)。」Freudによって、心理療法の世界が開かれたといえるが、その背景には、このような自己の核や一貫性があったこと再認識しておくことは、非常に重要なことに思われる。これは、バリントも同様にのべており、先述した二の世界が前提とされているということである。自己と対象、自我と本能、意識、無意識の葛藤など、二が成立している世界であると言える。

では現代ではどうなのか。2000年以降の青年の特徴として広沢(同 p. 16-17)は以下のように述べている。「われわれは絶えずタッチパネルの画面と対峙し、いつしかパソコンのシステムの中でわれわれはものを考え、行動するようになってきた。このような画面は人々にとって世界に通じる窓として、自己の構造や機能をも変え、タッチパネルのような自己感、世界観すら育まれても不思議ではない時代となった。心理学では「アスペルガー」「自閉症」「発達障害」あたかもこの概念が、「(社会的な)自己の確立」の必然性を見失った時代を理解する上での救世主であるかのように専門家の注目を浴び続けている。この時代を自己の視点でまとめると、青年たちにおいて、新たな自己のあり方が顕在化した時代といえるかもしれない。つまり自己の統一や一貫性への志向が減弱していても、それがある程度許容され、しかもそのようなもとでも機能する何らかの「自己」のあり

方が育ち始めている時代、しかしいまだそれをどのように捉えればよいのか戸惑っている時代と言えるような気がする。2000年以降、にわかに注目を浴びてきたのが成人の ASD(PDD)である。彼らのこころのあり方こそ、従来の臨床心理学や精神病理学では理解が難しいのである。しかし逆にこのことは、近代西欧型自己像を暗黙の前提に置いた臨床心理学や精神病理学の考え方を、根本的に見直す好機にもなろう(同 p.25)。」

また広沢は発達課題について以下のように述べている。「発達課題(developmental task)とは、「人間が健全で幸福な発達をとげるために各発達段階で達成しておかなければならない課題」である。ハヴィガーストは、発達課題を自己と社会に対する健全な適応にとっての必須の学習として捉えた。一中略—このような実践理論は、Freud 以来の心理学の集大成の一つに位置づけられよう。したがって、多分に先に述べた近代西欧型自己を念頭に置いたときに、理解しやすい具体的な自己の確立方法を示したものといえる。一中略—いずれにしてもこのような教育を受けてきた者ならば、まずは近代西欧型自己を、人間としてのこころの標準とみやすくなる可能性もあるかもしれない(同 p.21)。」我々が心理学の教科書でいまだ学び続けているのはこのような発達課題である。広沢は以下のように続ける。

「やはり精神病理学や臨床心理学においても、一旦、近代西欧型自己像を人間としての(暗黙の)基準から外す試みがあってもよいのではないかと思う。そうでないとわれわれは、前章で述べた1990年以降の青年の精神病理を、すべて「自己の成立不全」としてしかみられなくなるか、「了解不能な精神現象の出現」と括らざるを得なくなる。前者の視点に立ってしまえば、現代の青年の種々の精神病理は、それこそ従来の統合失調症の病理との差異が失われ、われわれの役割は指示的・受容的な精神療法で終わらざるを得なくなる。後者の視点に立ってしまえば、精神療法(カウンセリング)理論の射程外の精神病理となり、精神療法そのものの意味が失われてしまいかねない。(同 p.25)」

「タッチパネルのような自己感」という言葉で若者の自己感を描写し、

従来の枠組みではとらえられない心性を理解するために、従来の心理療法が前提としてきた西欧近代型自己という人間の基準を一度外すことを提案しており、現代の意識を捉える時に、非常に意味があるのではないかと考えさせられる。そこには、現代の心性を従来の病理で括ってしまうのでもなく、また従来の発達段階をもとにして、そこにいたっていない未熟な心性とするのでもなく、また了解不能とするのでもない新たな視点で捉える必要性が含まれている。広沢の言うように、従来の発達段階や病理から捉えるのでも了解不能とするのでもないとするれば、現代に特有の意識のあり方として見つめ捉えていくことが選択肢として残されるのではないだろうか。

6、現代の意識を「非二」としてとらえる試み

広沢、田中らの論からは、現代の若者の心性が、従来の精神療法・心理療法の枠組みではとらえられないことがわかる。従来は、今まで色々な論で見てきたように三者構造、二者構造といった病態水準と関連した人格構造理解であり、病態水準的理解であったが、自閉症や発達障害の心性などはそれでは位置づけることはできない。「タッチパネルのような自己感」という言葉が示すように、三者構造にも二者構造にも、またそれに関連した精神病理にも当てはまらない心性が増えてきていると言える。Balint は、それらに当てはまらないものを創造領域と述べた。しかしその幅は広く、三者構造が成立している芸術家にも創造領域がテーマになる場合も含まれている。しかし現代で問題になってくるのは、三者構造、二者構造といった枠組みに当てはまらない者にとっての創造領域であると言え、それは二者関係、三者関係ではない世界、「非二」の世界を生きるものにとっての創造領域と言えるだろう。

また Meltzer や木部の論からもわかるように、「非二」の世界にも、自閉症など、本質的に「非二」であるものから、生き方のモード(田中)とし

ての「非二」までその幅は広く存在している。しかしそれらのなかに共通性を見出し、なおかつ微妙な差異をも見出していくことで、三者構造・二者構造を生きるのではない者の心性として、「非二」を描き出すことはできないだろうか。また、通常の発達論として新生児や幼児の場合には、確実に「非二」と言える状態(Winnicottの絶対的依存、Balintの一次愛など)が存在し、それが発達の一つのプロセスであり、次に二への意識へとつながっていくと考えられてきた。しかし乳幼児期を過ぎた者にとっての「非二」の状態は、病態水準での理解では無理があることに示されるように(広沢2010、田中2016)、従来の発達理論から通常の二者関係・三者関係への発達の単なる遅れとしての「非二」の状態を説明できる類のものではないと言える。本部が自閉症児の発達変化に、自閉症圏にとどまらない事例や、二者関係とも三者関係とも言えない境界例圏を曖昧ながら設定する意味があるのではないかと述べるのは、そこに単純な発達経過では述べきれないものがあるという意味であろう。そこには、「非二」の世界なりの心性、必ずしも二者関係・三者関係へ発展するものではない独自の「非二」のあり方がみえてくるのではないだろうか。あえて二者関係以前という言葉を使用せず(それは暗に二者関係、三者関係へ移行する途中のプロセスという意味合いを含むものとなる)、「非二」という言葉を使用するのには、そのような意味合いを含ませることである。Balintがあいまいに描き出した創造領域のような視点を介在させることで、病態水準ではない新たな視点でこの「非二」の世界の心性を捉えることができるのではないだろうか。

また Winnicott が、一人の人間として生まれるとはどういうことかを描写したが、それは彼自身が述べるように従来の二者構造、三者構造を基準とした精神療法・心理療法では既に果たされたとされる課題であり、当然の前提としてスタート地点と考えられていた人間の姿であった。そうではなく「非二」の世界の心性を考える時には、未生の状態から Winnicott が述べるようにまず人間として生まれること、ギーゲリッヒの言葉でいえば、心的誕生を果たすことが、スタート地点ではなく、むしろ一つの目指され

るべき目標でもある。自閉症について、精神分析での心的次元論や、セラピストの態度に模索されているように、「非二」の世界の心性を捉えることは、そのために必要な関わりを考えることにもつながり、ひいては現代に必要な心理療法のあり方を考えることにもつながると思われる。

参考文献

- アン アルバレス, スーザン・リード(2006)『自閉症とパーソナリティ』倉光修
監訳 創元社
- 内海健(2015)『自閉症スペクトラムの精神病理—星をつぐ人たちのために』医学
書院
- 小小木啓吾編(2002)『精神分析事典』岩崎学術出版社
- 河合俊雄(2010)「はじめに—発達障害と心理療法—」 河合俊雄・田中康裕編
『発達障害への心理療法的アプローチ』創元社 p.5-26
- 河合俊雄(2013)「大人の発達障害における分離と発生の心理療法」 河合俊雄・
田中康裕編『大人の発達障害の見立てと心理療法』創元社 pp.4-20
- 河合俊雄(2016)「発達障害の増加と発達の変異型化」 河合俊雄・田中康裕編
『発達の変異型化と心理療法』創元社 pp.4-24
- 木部則夫(2006)『こどもの精神分析 クライン派・対象関係論からのアプロ
ーチ』岩崎学術出版社
- 衣笠隆幸(2008)「パーソナリティ障害と発達障害—重ね着症候群の研究」 『精
神医療』49巻 35-45
- 武野俊哉(2010)「ユング心理学を診療に生かす」, 『臨床精神医学』39(1), 51-58
- 田中康裕(2017)『心理療法の未来 その自己展開と終焉について』創元社
- Tustin(2005)『自閉症と小児精神病』平井正三監訳 創元社
- 橋本尚子(2017)「M. Balint における創造領域と「非二」について—二者関係・
三者関係との対比から」 『京都学園大学人文学部人間文化研究』第39号
27-49
- 平井正三(2016)「自閉症中核群への精神分析的アプローチ」 福本修・平井正三
編『精神分析から見た成人の自閉スペクトラム —中核群から多様な拡がり
へ』誠信書房 pp.2-19
- 広沢正孝(2010)『成人の高機能広汎性発達障害とアスペルガー症候群—社会に生
きる彼らの精神行動特性』医学書院
- J. R グリーンバーク(2001)『精神分析理論の展開』横井公一監訳 ミネルヴァ書
房
- Neumann, E(1954) the Origins and History of consciousness, Routledge & Kegan

- Paul, London; Pantheon, New York, 1964. E. Neumann 『意識の起源史』 林道義訳 紀伊国屋書店 1984, 1985
- Samuels, A (1985) Jung and The Post Jungians, Routledge & Kegan Paul.
- サミュエルズ (1990) 『ユングとポストユンギアン』 村本詔司・村本邦子 訳 創元社
- Meltzer (2014) 『自閉症世界の探求』 平井正三監訳 賀来博光・西美奈子訳 金剛出版
- Meltzer, D. (1976) Temperature and distance as technical dimensions of interpretation. In; Sincerity and Other Works; Collected Papers of Donald Meltzer, edited by A. Hahn. London; Karnac, 1994
- S・F キャセッセ (2005) 『入門 Meltzer の精神分析論考 Freud・クライン・Bion からの系譜』 木部則夫・脇谷順子訳
- Francesco Bisagni (2010) Out of nothingness, Rhythm and the making of words, Journal of Analytical Psychology, 55, 254-272
- Francesco Bisagni (2012) Delusional development in child autism at the onset of puberty: vicissitudes of psychic dimensionality between disintegration and development, The International Journal of Psychoanalysis, 93, 667-692
- Jean Knox (2011) Self-Agency in psychotherapy. W. W. Norton and Company
- Jung, C, G (1921) 'The therapeutic value of abreaction' Routledge. CW16.
- Jung, C, G (1913) 'The theory of psychoanalysis' Routledge. CW, 4
- Jung, C, G (1963) Mysterium Coniunctionis, Routledge. CW, 14
- Jung, C, G (1969) Psychology and Religion: West and East, Routledge in CW, 11
- Winnicott D. (1965) The Maturation Processes and the Facilitating Environment: The Hogarth Press London 『情緒発達の精神分析理論』 牛島定信訳 岩崎学術出版社 1977